

論 説

外国人のみた創立期官営八幡製鐵所

長 島 修

はじめに

<問題の所在>

本稿は、1901年操業を開始した官営八幡製鐵所（正式には農商務省所管製鐵所¹⁾）について、海外の人々はどのように見ていたのかを検討することが課題である。なぜ、こうした考察が必要とされるかという点、当時の国内の八幡製鐵所に対する見方と外国人の見方とはかなりの差があったという事実があるからである。八幡製鐵所に対する評価の違いがなぜ生じてきたのかを検討することによって、八幡製鐵所の性格の一つの側面が浮かび上がってくるからである。結論的に言うならば、当時の日本の帝国議会や報道の八幡製鐵所に関する評価が大きくバイアスのかかっていたのである。そして、日本側のこうしたバイアスのかかった見方は、その後の八幡製鐵所のあり方を左右する問題となったのである。従来、八幡製鐵所研究ではこの点について十分な考慮を払ってこなかったため、1901年の操業開始から1906年までの間を一貫して捉えられ、同時に否定的評価が定着してしまっている。しかし、そうした評価が人為的に作られたとすると、実態についても謙虚に検討しなおし、政策的な評価も再検討する必要が出てくるはずである。本稿では、何故、八幡製鐵所の評価が異なってきたのかも含めて、従来殆ど省みられていない外国人の評価を紹介し、何故日本人との間に評価の格差が生じたのかその理由についてまで明らかにしたい。

<創立期八幡製鐵所の概況と論点>

創立期製鐵所の経緯についてはすでにいくつかの著作²⁾があり、ここで詳細に論ずる必要はない。しかし、本稿で問題とする課題を提示するうえで若干の論点をあきらかにしておくことが必要であろう。そこで経過を簡単に紹介したうえで、何を問題とするか、ここで簡単に整理しておこう。

八幡製鐵所は、1901年2月高炉の火入れがおこなわれ、同年11月18日には議員、外国商人、官僚、皇族、新聞記者を招待し、大々的な作業開始式を開催した。しかしながら、この際作業

上のトラブルがあり、その後の八幡製鐵所の評価を著しく下げることになった。八幡製鐵所の操業過程と同時に、1900年に装甲板および砲身材について吳造兵廠³⁾において生産する製鋼所建設予算が第15議会(1900年12月25日～1901年3月34日)に上程されていた。これは、製鐵所と海軍の二重投資になるとの厳しい批判があり、衆議院は予算通過したものの、貴族院で否決され、01年3月両院協議会の結果、第15議会で通過をはたさなかった⁴⁾。この吳拡張予算の議会通過失敗について、海軍軍拡を進める海軍は危機感を深めていた。吳拡張予算は、漸く第16議会(1901年12月10日～02年3月9日)を通過し、吳において製鋼所建設が行われた⁵⁾。

一方、八幡製鐵所の建設は、予定の通り進むことができず、創立費予算(1896～1901年度の継続費)だけでは設備を完成することが出来なくなることが明らかとなった⁶⁾。開始式に製鐵所操業を間に合わせるための設備費用に支出して、既に外国に注文した機械類の支払い費用を追加予算で要求するという形(議会の事後承諾という形式)をとらざるをえなくなった。すなわち、議会の事前の承認をえずに、予算を流用せざるをえなくなった⁷⁾。その責任をとって、製鐵所建設を実質的に指導してきた責任者である和田維四郎製鐵所長官は、開始式の3ヶ月たらずしか経っていない02年2月3日退職し、最終的には懲戒免職になった。和田にかわって、4月、陸軍総務長官であった中村雄次郎が製鐵所長官となった。そして、02年には設備の未完成のままで操業していた製鐵所について、その後のあり方を調査検討する製鐵事業調査会(1892年度予算)が発足した。同調査会は製鐵所の民営化を答申した。しかし、日露戦争を前に答申は実現されず、日露戦争による設備の大拡張によって製鐵所は事実上完成し、安定的な操業を維持するにいたった。

以下では、第1に、製鐵所開始式における外国人側の評価をまず検討し、それが日本側の評価と何故異なるものとなったのか、その理由も合わせて検討する。第2に、和田長官辞任についての外国人側の評価と日本側の評価について検討する。

1, 製鐵所開始式前後の評価

<八幡製鐵所開始式と外国人>

成立した製鐵所は、一体どのような性格のものであったのか。外国人の目からみた八幡製鐵所がどのようなものであったのかを紹介しつつ、製鐵所の性格を考えてみよう。

1901年11月18日の開始式に招待されたThe Japan Weekly Mailの記者は、The Iron Foundry at Wakamatsuという記事⁸⁾の中で、製鐵所開始式の実態と見学によって得た製鐵所の状況を克明に報告している。八幡製鐵所への招待状を受け取った記者は、晴天の下、開始式に参加した人々、式次第について詳細に報告している。製鐵所開始式の様子を極めて好意的に描いている。

記者は、来客の挨拶、約30人の外国人招待客に配られた弁当にはワインと炭酸水がついていたこと、箸がついていたが、牛肉や羊肉にはナイフとフォークがなく、食事に難儀したことなどさまざまなエピソードをまじえて外国人が開始式に招待された模様を報告している。領事、アルフレッド・グラバなどの商人が、長崎、横浜、東京から招待されたと伝えている。

記者らは、食事の後、工場の視察に移った。工場視察は、かなりいいかげんな（desultory）もので、外国人を案内する人間もいなかったようである。外国人たちは、一応、製鐵所の中の鑄鉄場、平炉工場、圧延工場など主要設備を見て回ったようである。イギリス人であると思われる記者は、一部はアメリカ製であるが殆どがドイツ製であると設備の状況を説明し、しかも、非常に巧妙なドイツの最新製のものであると指摘している。製鐵所が棒鋼、鋼板、レールなど商業用の鉄鋼（Commercial iron）を製造するためのもので、装甲板（Armor Plate）、大砲をつくるための設備がなく、記者の理解するところでは、戦時中に海外からの鉄鋼を自給するために建設されたのではないかと述べ、その目的を達成するためにはさらに追加投資が必要になるだろうと指摘している。記者は、鉄鋼の専門家ではないと断りながらも、鋭い観察を行っている。

建物や工場の計画構想は、非常にうまく設計されており、鉾石や製品の運搬設備の巧みさなども評価されている。設備は、最新式で、ドイツ製がほとんどで、ただ、こうした巨額の支出によって建設された製鐵所が経済的に成功するかどうかは部外者には判断できないと謙虚な態度もしめしている。現場の作業で彼らをおどろかせたこととして、外国の同種の工場と比較して、あまりにもたくさんの職工が、働いており、これでは賃金支払いの上昇をまねき、生産費を高騰させるのではないかという疑念を表明している。記者は、2 - 3年で製鐵所は民間会社に売却することになり、民間工場となった製鐵所は初期投資を回避して、輸入鋼材と競争できる価格で棒鋼、鋼板、レールなどの鋼材を生産することができるようになると予想していた。記者は、この日を最も成功した日（a most successful day）であり、招待客に対するhospitalityを賞賛しているのである。

もう一つは、イギリス領事E. A. Griffithがイギリス外務省に報告したImperial Japanese Government Iron and Steel Works at WAKAMTSUという報告である⁹⁾。この報告は、The Japan Weekly Mail¹⁰⁾の中に引用して紹介している。この報告はきわめて興味深い内容を示している。

この報告は、海軍省所管製鋼所案から農商務省所管製鐵所として八幡製鐵所が成立していった事実経過を正確におい、1901年成立した製鐵所の土地、港湾施設、鉄道、運搬設備、建物、原料、機械など詳細に報告している。ただ、設備の説明は、ドイツ製が多いということ述べているにすぎず、他の詳細な寸法、能力の紹介とともに客観的なものとなっている。この報告

で注目すべき点は2点である。第1点は、1894年釜石における銑鉄製造の操業が成功した後に、日本における製鐵所建設を決意したということを描いている。つまり、釜石の高炉操業の成功が官営製鐵所設立の契機になったとしているのである¹¹⁾。第2点は、陸海軍需要に応えるための元来の構想が、和田の考えによって、変更され、もっと一般的な広範な需要に応えるものに変更されたということである。そして官庁向け販売価格が直近5年間の輸入価格を基準に協議して決定されるということが公的に発表されたことを明らかにしている。そして、日本人一般に対して、大部分の鋼材は、輸入価格以下で供給することになるとしているのである。

The Japan Weekly Mailの記事は、イギリスがかなり詳細にこの間の事情を掌握しているうえ、製鐵所の詳細について熟知していたことがわかる。

さらに、もう一つの報告を紹介し、検討してみよう。Emile SchrödterによるThe Japanese Imperial Steelworksという報告書である¹²⁾。これはドイツ人が調査したもので、製鐵所の完成図面、第1高炉、周りの風景、熱風炉など建設途上の製鐵所の写真5枚が掲げられ、設備の規模まで詳細に報告した極めて貴重な報告書である。同報告書は、この製鐵所の建設は、ヨーロッパとアメリカ合衆国によって独占されていた世界の鉄鋼市場に新たな競争者が出現したとしている。そして次のようにのべている。

「かつて提案された軍需素材をつくる考え方は、放棄されている。東アジアの工業発展の最も重要なステップとなったこの事業の将来は、興味をもって観察されるだろう。隣国中国においては同じ性格の製鐵事業が過去においてははじめられたが、中国の官僚的な政策のために、それは死んだも同然となった。この日本の新しい企業(enterprise)は、最初から大きなエネルギーで始められたばかりでなく、取り巻く環境は大きく異なっている。そのため、中国の失敗の繰り返しは多分ありえないであろう」¹³⁾

製鐵所は、ゲーテホフヌングヒュッテの設計による製鐵所計画であるから、ややその賞賛は差し引いて考える必要があるが、製鐵所が軍需素材をつくるという構想を放棄したことを明らかにしたうえで、中国と比較した製鐵所の建設の相違を明確にしている。その近代的な設備とすぐれた構想力は、様々な困難があるとしても、製鐵所建設の成功とそれが東アジアの工業発展の画期となっていることを明確に示していたのである。それが、軍需需要ではなく、一般工業用素材供給の製鐵所として建設されたという点を指摘している。

日露戦争勃発直後のThe Board of Trade Journalにおいては、東京からの報告として、製鐵所の現状を伝える記事が掲載されている¹⁴⁾。この報告は、前3つのものと異なり、時期的には数年後のものである。この点を注意する必要がある。この報告は、製鐵所の沿革と製鐵所の

立地条件，設備，原料条件，製品，販売など包括的な報告であり，*たんと*と客観的に製鐵所の現状を伝えている。注目すべき点をあげてみると，第1に，製鐵所の建設が実行に移されたのは，釜石製鐵所の試験操業が成功したことであるとしている。これは以前の報告書と同じ論旨である。第2に，製鐵所製品の仕様をすべてあげ，製造販売している鋼材の詳細を掲載している。生産物のかなりの部分が海軍向けになっている。最大の生産物である重軌条も京釜鉄道向けになっている。日露戦争勃発時の製鐵所の実態が軍需に応ずる製造所であることを伝えている。しかし，装甲板を製造していないことはきちんとおさえている。第3に，圧延設備に関して詳細に検討されていることである。イギリス製の圧延機は外輪，薄板，鍍金関連設備であり，アメリカ製は厚板（plate），線材，線材延伸であること，その他は殆どドイツ製である。こうした設備の配置を次のように評価している。「2 - 3の例を除いて，製鐵所当局は，ヨーロッパとアメリカで得られる最良の機械を購入する賢明な政策を採用している。いくつかの機械は，最も安い市場価格で購入していることは明らかである。設計が時代遅れで完成から程遠い機械もある。しかし，こうした設備は例外である。製鐵所で利用されている機械は殆ど総てが最も現代的なタイプのものである。」¹⁵⁾工場の建物は，波板型の鉄骨作りであり，運搬機械，ボイラ - などはイギリス製であると，自国の製品や技術がどのように使われているかを検討している。

以上で紹介した外国人の ~ の観察についてまとめておこう。

第1に，外国人記者や雑誌の基調は，製鐵所がすぐれた設備であり，後進国として出発しながら，すぐれた技術水準の製鐵所を建設しえたことを高く評価している。 ~ のように東アジアにおいて新たな競争者の出現という画期的な意義を評価しているものもある。

第2に，日露戦前には，製鐵所は専ら普通鋼材生産の製鐵所として建設されていたが，日露戦争勃発後では軍事生産向けの製鐵所となっている。 ~ の報告が製鐵所をいずれも普通圧延鋼材を生産する一般工業向け製鐵所として建設されていると把握している。

第3に，製鐵所がドイツの設備をほぼそのまま持ってきているが，同時にイギリス，アメリカの設備が部分的に使用されていることに注目している。これらの設備の殆どが当時の最新鋭の製鐵設備であることは，共通に指摘している。設備の有力な売り込み先としての日本の発注にも関心を寄せていることが行間からも読み取ることができる。

第4に，相当詳細な設備技術情報が，外国に知れ渡っていることは注目に値する。 ~ は，製鐵所建設時の写真をはじめ，設備内容について詳細に報告がされていた。外国人達は，東洋の小国であった日本の製鐵所の建設に関心をもってきている。しかし，それは未だに欧米諸国の水準とは大きくかけ離れており，実際の競争相手のなるという評価にはなっていないが，将来的には，その競争の基盤が出来つつあるという認識であった。

第5に，製鐵所建設の経過は，海軍省所管製鋼所案から製鐵所の建設にいたる過程について

もかなり正確にその経緯を捉えている。、 の報告は、釜石の高炉操業の成功¹⁶⁾を前提にして製鐵所建設に踏みだしたという点を指摘している。製鐵所建設を釜石操業と連続的に捉えていることは注目に値する。

<製鐵所作業開始式の失敗と日本側報道>

製鐵所開始式の失敗については、日本の新聞、雑誌などで大いに取り上げられ、各方面から製鐵所の技術的未熟さを攻撃された。

『時事新報』1901年11月27日では、「枝光の製鐵所は盛大なる開業式を行うて衆賓の眼前に其伎倆を示さんと為したれども事心と違ひ予期したる如き良好なる成績を挙ぐるに能はざりしに反し海軍省の呉造兵廠にては製鋼の作業素人を驚かしたる由にて東京より二製造所を見物に赴きたる人々の帰京するや孰れも枝光を貶して呉に感服し居れり製鐵所にとって恰かも呉の名を成さんが為め骨を折りたるが如き姿に終ったという貴族院議員の言が掲載された。さらに、「製鐵所の所謂不成績は啻に開業の当日に止まらずして万一後日に至りても思はしき結果を収むること能はざらん」と鉄道作業局の注文に対する製鐵所の納期の遅れについて指摘していた。

『報知新聞』に至っては、1902年10月11日から11月26日まで26回にわたって「製鐵所の真相 - 失敗せる製鐵所」という記事を連載し、製鐵所の経営、技術、予算、計画、原料獲得について酷評した。『東京経済雑誌』(第1109号、1901年11月30日)においても「枝光製鐵所の失態」という記事をかかげ、開始式における高炉作業の失敗と軌条圧延の失敗について紹介し、「御臨場の伏見宮殿下を始め奉り、貴衆両院議員、当局大臣皆茫然たりし有様」と当日の模様を伝えた。製鐵所開始式の不始末とは、開始式において、来賓に出銑の様子を見せようとしたが、炉温がさがって、コ - クスが吹き出すという失態を見せてしまったという事態をさすものであり、その結果、来賓たちは出銑の模様をみるのに1時間近くも待たされるという事態になったのである¹⁷⁾。政治的思惑もあり新聞や雑誌記事が事態を客観的に報道しているとはいいがたいが、総じて製鐵所開始式の作業失敗は事実であり、そのことは製鐵所のその後の予算獲得などにマイナスに作用したことは明らかである¹⁸⁾。当日の事態については、技術的にみて大きな失敗ではなく通常よく起こりうることであることは、和田長官がその後新聞などに談話を載せて反論したが¹⁹⁾、一度出来てしまった評判を回復するのは至難の業であった。

さらに製鐵所開始式における作業不始末のため、海軍が製鐵所開始式に合わせてセットした呉造兵廠(製鋼所設立計画)見学会の結果と比べられることになり、製鐵所への風当たりを一層強める結果となったのである。

2，海軍省の議会工作と製鐵所

<製鐵所作業開始式と海軍>

海軍省は、第15議会に呉造兵廠を拡張して、製鋼所を建設する予算案を提出した。この予算は、呉において装甲板及び大砲砲身を製造する設備を建設するために、製鋼所を拡張建設するというものであった。これは、1900年8月29日海軍大臣山本権兵衛から内閣総理大臣宛に「軍艦用甲鉄板並砲盾用鋼板製造所設立」として、提出されたものであった。これは、請議のとおり可決され、9月12日大蔵省へ予算²⁰⁾として通牒された。閣議の決定によれば、機械費560万円、建築費68万3千円合計628万円の1901年度から05年度5ヵ年継続費であった。このうち既定継続費の流用、汽船の払下によって、65万円が一般会計財源から支出されるという計画であった²¹⁾。しかしながら、第15議会衆議院では、かろうじて呉造兵廠拡張費は通過したが、貴族院においては同予算を削除したため、1901年3月22日両院協議会が開催された。協議会は貴族院修正のごとく削除することに決定し、呉造兵廠拡張費は第15議会を通過しえなかったのである²²⁾。これまで殆どの艦艇をイギリスなど先進国からの輸入に頼っていた海軍は、艦船の自給化を進めるためには、装甲板など主要な兵器素材も国内で生産する計画をたてていたのである。製鋼所予算の獲得は、こうした海軍の計画の重要な一環であっただけに、当時の海軍首脳は、製鋼所予算の議会における否決に危機感を深めていたのである。

呉造兵廠拡張費の予算通過を実現できなかった海軍は、議会に対して海軍拡張費の理解を求めするために海軍をあげて議会工作活動を開始した²³⁾。この活動は、極めて政治的な意味合いをもった活動で、創立期製鐵所の日本国内における評価を下げる意味をもったものであった。

1901年11月18日の製鐵所開始式にあわせて、呉造兵廠の見学会を開催し、議員を呉に招待するための活動を積極的に開始した²⁴⁾。これは、海軍が、呉製鋼所予算の議会通過をにらんだ「御馳走政策」ともいわれ、議員の懐柔策であった²⁵⁾。この呉造兵廠への招待に対する工作内容は、「貴衆両院議員其他招待呉造兵廠觀覽二関スル件」(『公文雜輯』明治34年雜件二止28)²⁶⁾の中にかかなりのボリュームで残されている。貴族院議員、衆議院議員の全ての氏名をあげ、呉への招待の確認をとっている。そればかりでなく、内閣総理大臣桂太郎をはじめ各大臣、秘書官、次官、総務長官まで、対象としていたことが確認できる。

その対策は海軍あげてのものであった。山本権兵衛海軍大臣から製鐵所開始式に出席する議員に対する製鐵所開始式の送迎招待状が発送された。そのための宿泊設備の手配、送迎のための準備は海軍あげて行われた。海軍艦艇(磐手、常磐)を派遣し、艦艇に乗り切れない議員らには、製鐵所開始式の帰り11月19日午前6時発臨時列車の無料乗車切符を発行し、それに乗らずに呉にくるものに対しては運賃割引証を発行した。

2隻の艦艇に便乗した議員たちは、11月13日早朝横浜をたち、16日に呉を見学し、18日門

到着までわずか食料費 1 日 1 円という格安の食事つき旅行であった。往きに立ち寄らせることは勿論のこと、往きに訪問できなかった者にも訪問の便宜をはかるという周到さであった。議員に対して発せられた招待状の 1 通では以下のようになっている。

「拜啓此度枝光製鐵所開始式二臨マル、御序ヲ以テ呉造兵廠ヲ御覽被下度儀御案内申上候處御請相成候二付テハ幸茲ニ磐手、常磐ノ二艦来ル十三日ヲ以テ横浜出發呉ヲ經テ門司二回航ノ便宜有之候二付キ同艦ニ御便乗相成候二於テハ枝光ニ臨マル、二先チ呉ヲ御覽濟ノ御都合ニ取計可申候
二艦ノ義八寢室ノ数ニ限有之一艦二十五名宛合セテ五十名以内御便乗差支無之候二付テハ貴答ノ到着順ニ依リ御申込ニ応スヘク候間思召有之候ハ、来ル十二日午前八時マテニ到着候様得貴答度左スレハ同日中ニ航海發着日割等差上可申候
明治三十四年十一月 海軍大臣 山本権兵衛
猶々枝光ヨリノ歸途呉ニ御立寄ノ諸君ノ為メ二十九日ニモ造兵廠ヲ入御覽候コトハ変更セサル儀ト御承知相成度
猶又磐手、常磐ノ二艦八十八日夜門司港外ヲ發シ十九日朝呉方面ニ到着候様回航致候二付テハ枝光御覽後宮島宇品又ハ呉マテ御便乗ノ儀差支無之候
又便乗御申込数満員後ニ御申込ノ方ニハ更ニ便乗御断ノ通知ヲ發シ諾否ヲ明ニ可致候」²⁷⁾

呉における海軍側の製鐵所開始式出席者にたいする攻勢はかなり組織的に行われた。当日の呉の様子を伝える新聞記事はその異様な様を伝えている。18日の製鐵所開所式に出席した議員を中心とした賓客は、19日軍艦常磐と鉄道で約100名以上が呉海軍造兵廠へむかった。山本権兵衛海軍大臣、斎藤実総務長官、柴山鎮守府長官、山内万寿治大佐など海軍関係者は、総出で製鐵所開始式に出席した議員らを出迎えた。工廠内の砲材及び弾丸鑄造工場（第3工場）、魚形水雷工場（第4工場）、弾丸鍛錬水雷缶工場、弾丸工場、大砲砲架製作工場などほとんどすべての工場をくまなく案内し、さらに弾丸発射実験をおこなって、呉製鋼板の優秀さを実際に見せ付けることによって、呉製鋼所への予算への理解を求めたのである。「熱心に」山内が先頭にたって、説明した。山内は、「見よ英国製十二尹鋼板を打貫きしに一発の弾丸に脆くも貫通されたり、而して本廠特殊の技能を以て製鋼したるものは厘々六尹の鋼板すら些の弾痕を止めたるまでにて容易に貫通せられてあらざるを」²⁸⁾と説明して貴族院衆議院議員に対して呉製鋼所の優秀さを印象付けたのである。

あまりの攻勢に対し、記者ですら次のような報告を送らざるをえなかった。

「今期の議会に於ても製鋼所の問題の議事日程に上されんとするを聞く、製鋼所の独立当否如何は速に之を論断することを為さず今は唯本日議員觀覽の実況を聞けるま、報道し夫の製鐵所作業の報と相

対看するに便ならしめんが為通信に付すること爾り、但し山本海相以下が特に西下して開院間際の今日兩院議員を迎へて造工廠を隈なく通覽せしめ仔細なる説明を與へて其技術振りを納得せしめんと努めたるが如きは蓋し為す所なくして然らんや」²⁹⁾

すなわち、海軍は、製鋼所作業、砲弾発射実験を議員、報道陣に披露し、海軍挙げて議会の意見を海軍側に取り込む作戦を展開した。呉造兵廠の山内は、斎藤実の下で、装甲板の検討をしていたが、この実験のために用いる装甲板の分析をはじめ、ニッケル、クロム以外にどのような成分が含まれているかを分析し、そのための材料さがしをはじめ「議会前二一働」³⁰⁾したいと予算獲得のための周到な準備をしていたのである。しかし、海軍は、装甲板製造の十分な準備ができていたわけではなく、予算獲得のための工作をしていたといってもよいのである。とりわけ議員を印象付けた射撃実験は、11月9日亀ヶ有（呉）において試製した装甲板が、16日の観覧実験によつて間合つたのであつた³¹⁾。

製鋼所予算の貴族院における否決を覆すため、世論を誘導しようとする露骨な海軍のやり方を新聞記者すら感知せざるをえなかつた。偶然ではあつたが、製鐵所開始式の製鐵所側の不手際と、この海軍造兵廠の用意周到な招待とが対照的であつただけに、世論誘導は一層の効果を高めたのである。海軍が、製鐵所開始式への送迎を利用して、自らの予算獲得のための活動を展開していたといつても過言ではないのである。

<海軍予算の成立と製鐵所評価>

貴族院議員子爵堀田正養は、第16議会で次のように、両者を比較して、呉製鋼所拡張予算の通過を主張している。

「若松八創業ノ時デアリマスカラ、決シテ十分ノ結果ハ得ナイ、随分れーるヲ拵ヘル所モ見マシタ、又鉄板ヲ拵ヘル所モ見マシタケレドモ、未ダ職工ノ不慣レト又十分ノ試験ノ期日ヲ経ナイト云フ所カラ十分ニ出来ハ致サナイ、ソレデアルカラ若シモ是デ例ヘバサウ云フ鋼板ヲ拵ヘルトシテモ、ナカナカ容易ニ出来得ナイト云フコトデアツテ、時ノ短イ間ニハ到底出来得ルト云フコトハ考ヘラレナイ・・・若松デサウ云フモノヲ製造スルヨリハ呉デ製造スル方ガ余程早イト云フコトガツアル、ソレデ呉ノ如キハ大分二十一年頃カラ既ニサウ云フ鉄ノ工作上ニ付テハ色々ノ仕事ヲシテ居ルガ為ニ、今日デハモウ其試験ノ時期ハ経過シテ仕舞ツテ、ナカナカ熟練シテ居ル、既ニ我々ノ参ツタ時分ニ鋼板ノ試験板ヲ製造スル所ヲ見マシタケレドモ、ナカナカ慣レテ手際宜ク我々素人ガ見テモ出来ルヤウニ思フ、ソレデ既ニ其拵ヘタ板モ我々ノ参ツタ時分拵ヘタ板ヲ試験スルノハ見マセヌガ、併シ回ジ物ヲ試験シタ所ヲ見マシタケレドモ、其成績ハ我々素人ニハ分リマセヌケレドモ、段々承ツテ見ルト英吉利アタリデ試験スル法則ニ適ツタ試験ノ仕方ヲシテ、サウシテ、試験ノ結果及第シテ居ル有様

デアリマスカラ、斯ノ如キコトデアルナラバ呉デ鋼板ヲ製造スルコトシタナラバ必ず出来得ル」³²⁾

八幡製鐵所と呉を案内された、議員たちは呉における作業や実験を見学し、八幡製鐵所と比べて呉の作業がかなり熟練度の「あがっている」ことを目の当たりにして、呉への装甲板設備の可能性を強く自覚するにいたった。既に述べた、海軍の周到な議員工作は功を奏したのである。海軍は、とりわけ堀田正養一行に実験を披露するために、タ-ゲットを絞っていたことは確実である³³⁾。即ち、海軍の思惑通り堀田は演説したことになるのである。

呉製鋼所と八幡を見学した衆議院議員佐藤通代は、新聞紙上で、次のように述べていた。

「製鐵所は世人の知る如く軍器独立の旨意にて最初四百万円を投じて着手したるが其後追々増資し今日にては二千万円近くも支出したることなるに事初志に反し軍器独立は扨置き實際は普通一般の鉄器を製造するに過ぎざる有様とは驚入るの外なし是れとて完全なるものを製造するまでには尚ほ一千万円位は要する事ならん余は爰に至りて政府が今日斯る巨額を投じて該事業を遂行するの必要あるやを疑はざるを得ず何となれば国家財政之を許さざるのみならず実は民間に移すべき性質の事業なればなり斯く製鐵所を視察して余は其重要を感ぜざりしが転じて呉造兵廠を見るに当り四百メートルの距離に於て英国製の十吋と八吋との鋼板を的に下瀨火薬にて小形の弾丸を放ちたるに的中して二個の穴を貫きたり次に又六吋の鋼板に試験したるに同じく貫徹せり夫より呉製の縁が四吋程の鋼板に対して同じく下瀨火薬を以て一倍の弾丸を放ちたるに的中したるも貫徹せず微かに弾丸の跡を認むる程にて極めて好成绩なりし元來十五議會に於て政府委員は製鋼の見込あるや否やの問題に對し曖昧なる答弁を為したるを以て吾々反対したるなれば若し右の試験の如く優に外国品を圧する程の成績を得る以上は製鐵所の不要に反し製鋼所設置の必要を断言するものなり」³⁴⁾

製鐵所と呉造兵廠の見学結果についてのこの2人の貴族院、衆議院議員の感想は、八幡製鐵所の技術的な未熟さと呉製鋼所の作業技術の確かさを表している。製鐵所開始式における作業上のトラブルは、この両者の優劣を一層際立たせるものとなった。八幡製鐵所の場合は、1896年官制発布以後、和田長官の下で、製鐵所構想の変更があり、規模が拡大し、しかも2回にわたって追加予算を実施したにもかかわらず、未完成設備を残していた。さらに追加予算を議会上に上程してもそれを通過させるのは、財政状況が逼迫しており、政党を納得させることは非常に難しくなっていたのである。しかも、海軍省所管製鋼所案から操業開始に至るまでに、製鐵所の性格も変化してきていたのである。和田意見書によって製鐵所構想が変化したことの意味を、日本の議会関係者も含めて、一部の当局者を除いて、正確に理解している人は少なかったのである。また、議会関係者や新聞雑誌記者は、製鐵所の生産技術についての知識をもっていなかったのである。こうした状況のもとで、海軍の周到な接待戦略に、多くの人々がはまって

いたと言わざるをえないのである。

政党は製鐵所の性格について、外国人記者たちより明らかに貧弱な知識しかもっていなかった。佐藤通代にも見られるように、製鐵所が軍器独立のための素材供給製造所であることに一面的に理解されるような状況があったのである。海軍省所管製鋼所案ですら70%を一般工業向けの素材を製造する製鐵所構想³⁵⁾であったことが、理解されていなかったのである。銑鋼一貫製鐵所の普通圧延鋼材量産は、軍事用にも利用されるが、殆どは一般工業用のものである。そうした、生産構造的性格をもたざるを得ないのである。

3、和田製鐵所長官の辞任問題

<和田長官の辞職をめぐる評価>

和田製鐵所長官は、林農商務大臣の許可をえて、製鐵所作業開始を急ぐ余り、そのための設備費用に、既に注文をし、年度内に支払うべき海外機材購入予算の支払いを繰り延べ、議会に不足した分を予算要求するという計画であった。しかし、それは議会の承認するところならず、和田は、1902年2月3日に休職となり（罷免され）、8月18日懲戒処分された³⁶⁾。

和田製鐵所長官の辞職をめぐる評価は‘Wakamatsu Foundry’ *The Japan Weekly Mail*, Aug. 23 1902, PP197-198.に詳しい。その要旨を紹介しよう。

和田が、限定された資金状況のもとにあって、製鐵所の完成と操業を優先して、既に発注済の支払わなければならない海外発注の機械の支払い資金を、操業に要する工場費（既定の創立費予算継続費）に流用し、そのために懲戒処分となった経過を詳細に紹介している。もし、和田が、議会からの要求に従うとしたら、今度は公的に承認された計画からの乖離について責任をとられることになったであろう。彼は、製鐵所事業を中断するよりも予算の用途を変更して製鐵所を完成させることを優先することによって、自らの経歴をリスクにさらす決心をしたのである。彼は、農商務大臣に同意を取り付けた上でこうした措置をとったにもかかわらず、懲戒免職となったのである。国民は、これにたいして極めて同情的である。もともと日本に不利にならないような条件で製鐵所を建設操業し、一定期間経過した後国家に引き渡そうという外国企業からの提案があったという。政府は、それを振り切って独力でうまく出来るという結論に達したのである。しかし、その決定を正当化することはできない。展望は現在のところない。そうした中で、呉製鋼所の建設を国会は承認している。我々の目からみると、余りに急ぎすぎているようである。現在考えられるのは、最も安価に最も効率的な方法でその目的を達成する方法である。必要な援助は提供されるであろう。現在の事態は、惨憺たる結果におわった釜石の事態をおもいださせるものだ。若松製鐵所は、全く失敗というわけではないが、この不安の黒雲から脱するには多くの犠牲が必要である。それに対する犠牲の少なからざるものは、和田

のような人間を追放することであった。

この記事は、日本が独力で製鐵所を実施することはかなりの困難があり、多くの犠牲を払わなければ成功する見込がない。和田の懲戒免職処分は、その経過から見ても、決して正当なものではなく、むしろ和田のような優れた人材を失うことが日本にとって大きな犠牲となるということを主張しているのである。議会の要求や日本の新聞の論調が如何に当時の議会の駆け引きや政治工作に左右されていたのかを物語るものであった。

Steel Works in Japan, *Iron Age*, Oct. 16 1902は、The Japan Weekly Mailの記事³⁷⁾を引用して、さらに詳細な記事を掲載している。

この記事によれば、製鐵所が大島道太郎技監による構想の変更によって、創立費予算が膨張してきたこと、予算不足が物価上昇によって生じたこと、和田は海外注文分の支払いを延期して、製鐵所建設に予算を流用したことは状況から見て仕方がない選択であった。和田は、名誉においても正義においても反するものではなく、責任がないのであり、彼に対する多くの同情が寄せられている。彼は、自らの仕事に熱心のあまり思わぬ犠牲をしいられたのであると評している。

こうした和田の辞職について同情を寄せつつ、さらに製鐵所建設は失敗するとは思えないが、正常に稼動するまで巨大な資金が追加投資として必要となると予想される。製鐵所の建設と経営は、長い経験を必要とするのであり、この課題に勇気(Pluck)と進取の気性(Enterprise)で取り組んだということを賞賛した。そして、ことを急ぎすぎず、ゆっくりとやるべきであり、そうすれば進歩は確実である。最初はもっと小規模から始めるべきであると述べている。Daily Mailの記事としてこのことを紹介しているのである³⁸⁾。

イギリス、アメリカ双方の記事は極めて、和田の辞職について同情的である。このことは、製鐵所建設が議会の政治的駆け引きと政治工作に利用されてきたことを表すものであった。

明治半ば頃和田長官、大島道太郎技監に対する批判は、厳しいものである。前述したように『報知新聞』(1902年10月11日から11月26日)連載記事をはじめ、議会においても厳しい批判が浴びせられていた。製鐵所建設の直接の責任者である大島に対しては製鉄事業調査会の内部ですら人格を否定するような厳しい批判をあびせる者もあった。

「大島君ハ製鉄事業ニ経験ガナイ、他ノ銅山カ何カシテ居ツタ人デアル、ソレヲ兎ニ角日本ノ此大事業ヲ託スル十分ノ伎倆ノアルベキ人トシテ此重任ニ当テタノデアリマス、其事柄ハ善シトシテ、此ノ為ニ無益ニ此ノ製鐵所ノ成立ヲ遅ラシタト云フノハ私ハ甚ダ遺憾ニ感ジマス」³⁹⁾と述べて、大島がヨ - ロッパ方面に視察に行つて建設の時期を遅らせたことを非難した。そして「長官ト技監ノ専断デ総テヤルコトニナツタノデアリマス、之ハ自分ノ徳義上又自分ニ国家観念ト云フモノガアレバモウ少シ人ニ謀ルト云フ推量ガナケレバナラヌ」。囑託委員を置いていながら、「長官ト技監ノ専断デ総テヤルコトニナツタ」⁴⁰⁾。

予算の不足，流用に至った点についても，1902年には予算が足りなくなることがわかっていたにも拘らず，放置しており，「無責任ノ予算」になってしまっていた。「此大事業ノ衝ニ当ル者ガ充分ニ盡シ得ルノ途ヲ求メ又避ケ得ル途ガアルノデ盡サナカッタノガ失態ノ元ト思ヒマス，・・・官制ノ表面カラ言ヘバ長官ガ無論技監ヲ監督シ技監ヲ率ヒテ一切ノ責ニ当ルノデアリマスカラ，長官ノ責ト云ヘバ責デアリマスガ，私ハ遺憾ナガラ今日マデノ失態ハ行政官タル長官ヨリハ寧ロ技監以下技師ノヤリ損ヒト云フコトヲ事実ニ於テ認メルノデアリマス」⁴¹⁾

日本側の製鐵所批判は，議会，新聞のみならず，元製鐵所長官心得堀田連太郎，製鐵事業調査会委員長谷川芳之助⁴²⁾からも和田，大島に浴びせられていた。日本国内の，和田，大島に対する批判は，人格攻撃まで含む厳しいものであった。外国人からみると，製鐵所建設や操業の困難さは大きいものであるとの認識があり，むしろ有能な人材を製鐵所から流出させる結果となることを指摘していたのである。

こうした批判は，それ以後の製鐵所経営を規律づける意味では有効であったが，1901～2年における和田，大島に対する攻撃は極めて異様なものであった⁴³⁾。

おわりに

東洋における本格的な銑鋼一貫製鐵所である農商務省所管製鐵所は，当時の外国人からはかなり好意的にみられ，賛辞が寄せられていた。イギリスの報告は，製鐵所の設立経過や実態をかなり正確におさえたものであり，議会や周辺の日本人より客観的に内容を捉えていた。製鐵所が，銑鋼供給体制を整え，将来的にはヨ－ロッパと競争する可能性をもったこと，日露戦前までの時期においてはむしろ一般工業用鋼材を製造するものであること，ドイツの最新鋭技術を用いながらも要所でイギリス，アメリカ各々の進んだ技術を導入していること，などを的確に捉えていた。

一方，外国側の見方とは対照的に，創立期における日本における製鐵所についての評価は厳しいものがあつた。製鐵所開始式前年からの呉海軍造兵廠における製鋼所建設予算の議会上程という錯雑した政治の荒波にもまれ，議会と政府の財政政策をめぐる対立のなかで，製鐵所の評価を低めてしまった。海軍は，呉造兵廠における拡張予算を獲得するために，衆議院，貴族院議員にタ－ゲットをしぼり，製鐵所開始式にあわせて，呉造兵廠の見学と射撃試験を披露した。それは，意図せざる偶然的要因もかさなつて，海軍側の意図を実現することになった。海軍の周到な準備に基づく予算獲得策は功を奏したのである。対照的に製鐵所の低い評価を増幅せしめることになってしまった。国家資本として成立した製鐵所は，議会という政治の舞台でモニタリングを受けるという当然の政治的経済的性格にあまりに無防備であつた⁴⁴⁾。

創立当初の製鐵所は，1901年度創立費補足予算の獲得も失敗し，未整備のまま放置されると

いう最悪の事態に追い込まれていたのである。創立期の内外のギャップが埋まるのは日露戦後のこととなったのである。

(本稿は、2004年度立命館大学学術研究助成による研究成果の一部である)

注

- 1) 正式名称の農商務省所管製鐵所のほかに八幡製鐵所、若松製鐵所、枝光製鐵所、門司製鐵所など様々な名称が明治期の文献にはでてくる。単に製鐵所という場合も、農商務省所管製鐵所を指す場合がある。本稿では通称である八幡製鐵所を用いる。
- 2) 三枝博音、飯田賢一『日本近代製鐵技術発達史』(東洋経済新報社、1957年5月)、佐藤昌一郎「戦前日本における官業財政の展開と構造」、(『経営志林』第3巻第3号、同第4号、第4巻第2号、1966年10月、1967年1月、10月)、佐藤昌一郎『官営八幡製鐵所の研究』(八朔社、2003年10月)、長野暹編著『八幡製鐵所史の研究』(日本経済評論社、2003年10月)、小林正彬『八幡製鐵所』(教育社、1977年10月)、岡崎哲二『日本の工業化と鉄鋼産業』(東京大学出版会、1993年6月)などを参照。
- 3) 1889年、東京造兵廠の敷地が狭隘になったことから、造兵廠設立取調委員が設置され、90年2月から土地の買収に入り、1901年度に至るまでの13年間にわたる継続事業で造兵関連設備の建設が始まった。日清戦争が勃発すると、兵器の独立自給のため、兵器製作所構内に新たに仮工場が建設されることになった(1894年9月25日勅裁)。仮兵器工場建築のために山内万寿治はヨ・ロッパに派遣され95年6月帰国した。95年6月21日仮兵器製造所が設立され、山内万寿治が所長に任命された。山内がヨ・ロッパに行き発注していた機械類は到着し、85年度末には仮工場は竣工し、96年3月26日勅令によって仮兵器製造所条例が公布され、4月1日に施行された。96年度には12擲砲15擲砲薬莖、保式魚雷等を製造し、97年には12擲速射砲が竣工した。1897年5月21日兵器製作所と仮兵器製造所を合わせて呉造兵廠となった(『海軍造兵史資料 仮兵器製造所設立経過』防衛庁防衛研究所)。
- 4) 製鐵所と兵器用鋼材との関連については、製鐵所設立からその経過をまとめたものに、「大臣命ニ依リ鉱山局長調査 製鐵所ト兵器材トノ關係」(秘書科『復命書並報告書 自明治三十年 至同四十三年』製鐵所文書)がある。本資料を無批判に引用することは注意する必要がある。これは、当時の農商務省鉱山局長の理解するところをまとめたものであり、これが全て事実であるかの如く考えると大きな間違いを犯すことになるおそれもある。当時の農商務省官僚の見るところを大臣から諮問され記述したものである。例えば、「議會ニ提出シタル予算八閣議ヲ經タルモノナルヘキハ勿論ナルノミナラス製鐵所長官ハ製鐵所ノ計画ニ關スル意見ヲ定メテ之ヲ農商務大臣ニ具申シ農商務大臣ハ之ヲ採納シテ其ノ実行ニ必要ナル予算ヲ要求シ大蔵大臣ハ反復詳細ニ其ノ説明ヲ玩味シテ之ニ同意シ遂ニ閣議ニ提出セラレテ其ノ是認スル所トナリタルモノナル以上ハ今日ニ於テ製鐵所ノ事業計画ニ付キ海軍大臣ノ意見ト農商務大臣ノ意見一致セスト云フカ如キハ甚タ不可思議ナル現象ト云ハサルヲ得ス」(前掲「大臣命ニ依リ鉱山局長調査 製鐵所ト兵器材トノ關係」と製鐵所が手続きを踏んで拡張予算を組んだことその内容については海軍も同意していることを主張している。

いわば、和田長官などの行ってきたことを正当化するために作成されたものであり、資料とし

ては貴重なものであるが、扱いは充分注意する必要がある。筆者の見るところでは、製鐵所の見方が基本的には正しいと思われるが、創立期製鐵所の評価を下げて行くにしたがって、製鐵所の手続き上の正当性もかき消されて行き、結果だけが残って行くということになり、各所で誤った評価や事実誤認が生じた。本稿では、これら製鐵所文書の利用の仕方を踏まえたくて、あえて外部から創立期の問題を捉え直して、なぜこうしたバイアスが生じたのかその原因までさかのぼってみようとする試みである。

- 5) この間の経過については、清水憲一、松尾宗次「創立期の官営八幡製鐵所 第2代長官和田維郎を通して」(長野暹編著『八幡製鐵所史の研究』日本経済評論社、2003年10月)、清水憲一「創業期八幡製鐵所と兵器用鋼材」上、中、下『九州国際大学経営経済論集』第9巻2、3号。第10巻第2号、2002年12月、2003年3、12月)を参照。
- 6) 「製鐵所創立費追加予算二閣スル件」1901年9月28日、秘書科『明治三十年至同明治三十四年重要書類 但事業関係ノ部』製鐵所文書
- 7) 和田長官の懲戒処分理由は、正式には下記の通りである。

「三十四年度ノ初二於テ創立費ノ残額ヲ以テ既ニ負担スル義務ヲ支弁スルトキハ必要ナル工場ハ僅ニ一小部分ノ完備セサルモノアルカ為作業ヲ為ス能ハサルノ実況ナリシヲ以テ時ノ製鐵所長官和田維四郎八當時ノ農商務大臣林勇造ノ決裁ヲ経テ已ニ負担セル義務ノ内其ノ支弁ヲ延期シ得ルモノハ之ヲ延期シ追加予算ノ成立ヲ俟チ之ヲ支弁スルモノトシ差当リ作業上必要ナル工場ノ設備ヲ完カラシムルノ方針ヲ取り漸ク作業ヲ開始スルコトヲ得タリト雖其ノ結果国庫ヲシテ予算外ニ巨額ノ義務ヲ負担セシムルニ至リタリ」(閣第148号、明治35年5月5日 農商務大臣平田東助より内閣総理大臣伯爵桂太郎宛『公文雑纂』明治35年農商務省1巻83所収) やや分かりにくい文章であるので、解説すると、製鐵所創立費継続費の最終年度である1901年度の予算において、外国からの購入代金と関税改正による物品代価の上昇分100万円の追加予算を申請し、これによって作業を開始させることを優先し、不足金額の調査終了した後02年度予算で要求することとした。01年度予算における追加予算は、第15議会へ提出の手続きをしたが義和団事件による軍事費の拡大のなかで砂糖消費税、酒税法などの消費税の改正によって税収の増額を計らざるを得ない財政状況になっていた。したがって、各分科会の予算査定の方針では、經常部臨時部の新規要求は削除、各庁費の増加拒否、物価騰貴を理由とする増額要求の否認、管理の増俸拒否など、厳しい財政方針がとられたのである。こうした中において、製鐵所の追加予算要求が通過する見込みはなく、提出されなかったのである(『明治財政史』第3巻1083-1085頁)。しかし、既に契約し、支払わなければいけない外国から購入した機械類の支払いを優先すれば、事業を開始するための設備投資費用が不足する事態に直面したのである。外国への支払いを先にして、事業開始を延期するか、製鐵所の事業開始を優先して、外国への支払いを後回しにして、後に議会で追加予算を請求するかという選択に迫られたのである。既に、第1高炉の操業が始まっており、技師、職工、雇い外国人も雇用し、原料も積み上がっているなかで、経費的にも損失が大きければかりでなく、長年懸案であった製鐵事業に対する信用を失い、製鐵事業開始を延期するリスクが大きかったのである。和田は、農商務大臣の許可も得て、事業開始を優先する政策をとったのである。しかしながら、第16議会では、創立費追加予算補足費の要求は、「其予算ナキニ既ニ外国ニ向テハ物品ヲ注文シ内国ニ在テハ工事ヲ契約シ予算ノ要求ト謂ハシヨリハ寧ろ事後承諾ヲ求ムル者ト謂フヘク甚タ不当」(立憲政友会『第16議会報告書』1902年4月10日、22頁、『帝国議会報告書集成』第3巻)であるとの意見により、否決されてしまったのである。議会からみれば、議会の承認を

得ずに、継続費予算の追加を前提に製鐵所開始式を挙行したことになり、議会や周辺の人々の和田に対する批判は、厳しいものであった。農商務大臣は責任をとらず、責任は、和田のみが一身で引き受けたのである（同様の経過を説明した清水，松尾論文146-147頁の事実認識にはやや疑問がある。）。

- 8) *The Japan Weekly Mail*, Nov. 23 1901
- 9) Public Record Officeの資料の中から、筆者は、この報告の原文を見つけることができなかった。
- 10) *The Japan Weekly Mail*, Oct. 21 1902
- 11) このことは、釜石を民間の製鐵所として位置付けて単に技術的観点からだけ評価する見方に修正をせまるものである。つまり、釜石製鐵所を単に民間製鐵所と位置付けることはできないということを含意しているのである。
- 12) Emile Schrödter, *The Japanese Imperial Steelworks, The Iron and Coal Trade Review*, February 2, 1900 この報告は、*Stahl und Eisen*の翻訳に、写真や図を提供をうけて掲載されたものである。
- 13) *Ibid.* p. 215
- 14) Imperial Japanese Government Steel Works, *The Board of Trade Journal*, Feb. 28 1907, この報告は、*Japanese Government Steel Works*という題で、*Iron Age*, March 21 1907にその要約が掲載され、アメリカの人々にも日本の製鐵所の情報がイギリスを介して伝えられていた。
- 15) *Ibid.* p. 430
- 16) 釜石田中製鐵所の成功の技術史的な意義は従来から、高く評価されてきたが、釜石田中の連続操業が官営製鐵所建設へと政府を踏み切らせる決定的な要因となったというグリフィスの報告は注目に値する。田中製鐵所を単に所有形態からだけ見て、民間製鐵所として捉える味方に修正をせまるものである。筆者はかつて、釜石の田中への払下過程を分析して、釜石について「海軍は田中に製鐵事業を委託したかのような形」ととっていると指摘したことがある（長島修「官営製鐵所成立前史 - 官業釜石鉱山廃止以降 - 」『立命館経営学』第42巻第4号，2003年11月35頁）が、さらに深く検討すべき課題となっている。
- 17) 志摩海夫『鉄の人』（日本出版配給株式会社，1943年8月）136～139頁。1901年11月18日，開始式において，来賓に出鉄の様子を見せようとしたが，炉温がさがって，コ - クスが吹き出すという失態を見せてしまった。また，レ - ルの圧延作業においても失敗があったといわれている。これは，製鐵所の技術の未熟さを示すものであり，来賓の議員などの八幡に対する信頼を低めてしまった。小花冬吉製鉄部長はのちにその責任をとって辞職した。和田製鐵所長官によれば，炉孔を塞ぐ粘土が漏水のために，固結し，出鉄に時間を要することになったとのことである（和田製鐵所長官演説「製鐵所談」『門司新報』1901年12月7日）。
- 18) 勿論，全ての人が八幡を厳しく見ていたわけではない。製鐵所建設構想の段階から深く関っており，八幡にはむしろ厳しい見方をしていた政治家であり，実業家でもある井上角五郎は，八幡，呉ともに見学してその所感を『門司新報』（1901年11月22，23日）に掲載しているが，そこではかなり，両者を客観的に評価しており，「強ち枝光のみを批難する能はざるなり」として，両者を客観的にとらえている。しかし，こうした論調は，中央の新聞などにはほとんどみられない。
- 19) 和田製鐵所長官演説「製鐵所談」『門司新報』1901年12月7日。
- 20) 『公文別録』海軍省明治21～大正6年第2巻，明治32～39年，所収，国立公文書館所蔵。
- 21) 軍艦水雷艇補充基金特別会計により艦艇を国内で建造する計画をたてていた海軍は，1905年度ま

- でどうしても製鋼所を呉造兵廠の中に設置する必要があったのである（堤恭二『帝国議会に於ける我海軍』原書房，1984年8月，146頁）。
- 22) 前掲『明治財政史』第3巻1092頁。
- 23) 清水，松尾論文167～168頁において，呉製鋼所予算期の議会の状況について，触れられているので参照。
- 24) 清水，松尾論文132～133頁は，山内万寿治より山本権兵衛宛書翰（1901年10月2日，10月5日，斎藤実文書，国会図書館憲政資料室）を全文引用しており，当時の海軍が如何に世論を気にしていたかを表している。
- 25) 海軍は，呉製鋼所予算獲得のために，呉海軍工廠の設備見学会を開催し，技術的な知識に暗い議員に工場の稼働している様子を見学させ，八幡の作業の滞留と比べさせ，議員達を「煙に巻いた」とも言われている（一柳正樹『官営製鐵所物語』上，鉄鋼新聞社，1958年5月，336～338頁）
- 26) 清水，松尾論文注72参照。
- 27) 『公文雑輯』明治34年雑件二止28（防衛庁防衛研究所所蔵）については，清水・松尾論文でも触れているが，そのことの持っている意味について検討を加えていない。
- 28) 『大阪朝日新聞』1901年11月22日。
- 29) 『大阪朝日新聞』1901年11月22日。
- 30) 山内万寿治より斎藤実宛書翰（1901年8月27日，斎藤実文書，国会図書館憲政資料室所蔵）
- 31) 山内万寿治より斎藤実宛書翰（1901年11月10日授，斎藤実文書）。海軍側の議会報告や説明は多くの点で疑問がある。山内はあたかも，特許も獲得せずに，呉独自で装甲板の技術が確立したと第15議会（1901年3月閉会）で答弁し，自らの予算獲得の理由としているが，これは明らかに鉄鋼技術について知識のない議員たちをだました答弁である。実際，山内の斎藤宛書翰などによっても，十分に成分分析すら出来ていないことを明らかにしているのである。和田長官の国際法の観点もいれ，論理をわきまえた答弁（清水論文（中）85-90頁に長文の引用参照）とは対照的な欺瞞的な答弁である（和田答弁がもっている意味などについては筆者と意見の異なるところもあるが，清水の一連の論文，清水・松尾論文を参照）。海軍のこうした政治的な狡知の前に，製鐵所技術官僚たちはなすすべもなかったというのが真実のところである。
- 32) 『第16議会 貴族院予算委員会議事速記録』第3号1902年2月5日，40～41頁。
- 33) 山内万寿治より斎藤実宛書翰（1901年11月10日授，斎藤実文書）においては，「堀田氏一行未ダ来タラズ明日来ルカト被考候」と来呉を待ち望んでいることを述べている。結果的には，議会で堀田は海軍の予想した通りの演説をしたことになる。
- 34) 『時事新報』1901年11月26日，
- 35) 長島修「官営製鐵所成立史の一面 - 海軍省所管製鋼所案の性格に関連して -」（高村直助編著『明治前期の日本経済：資本主義への道』日本経済評論社，2004年10月）246頁。
- 36) 「閣第148号，明治35年5月5日 農商務大臣平田東助より内閣総理大臣伯爵桂太郎宛」（『公文雑纂』明治35年農商務省1巻83所収）。『官報』第5573号，1902年2月4日，第5738号，1902年8月19日を参照。
- 37) 'Wakamatsu Foundry', *The Japan Weekly Mail*, Aug. 23 1902, PP197-198.
- 38) *Iron Age*, Oct. 16 1902, P.28
- 39) 「製鐵事業調査会第13回議事速記録」堀田連太郎発言（1902年12月7日，411頁，『明治後期産業発達史資料』第58巻所収）。堀田は，山内提雲初代長官の後，和田長官が就任するまで心得とし

て臨時に製鐵所長官を勤めていた。堀田のような身内からの厳しい批判もあった。

- 40) 「製鐵事業調査会第13回議事速記録」(1902年12月7日, 413頁, 『明治後期産業発達史資料』第58巻所収)
- 41) 「製鐵事業調査会第13回議事速記録」(1902年12月7日, 417頁, 『明治後期産業発達史資料』第58巻所収)
- 42) 長谷川芳之助もまた囑託委員であったが、堀田の発言を支持し、同趣旨の発言を同じ場で展開していた(「製鐵事業調査会第13回議事速記録」(1902年12月7日, 418～424頁, 『明治後期産業発達史資料』第58巻所収)。
- 43) 「製鋼所一件も先ツ通過之勢ニ相成申候、議會八万事歳費増加之為メニ都合よろしく、右増加之宏徳は、洵々明々御座候、製鋼所之事ハ、閣下ガ一度御見聞ニ相成候末、いよいよ吳ニ置クコト必要ト御見認メ相成候ハ、此度も大ニカララシタル様ニ御座候、又福岡県製鐵所は、大分彼是ニ評判あしく、多少政府之失体ト相成候て、困り物ニ御座候・・・・

製鐵所和田も、イヨイヨ辞表ヲ差出シ候由、是ハ中々機敏ナル事ニ而、丁度辞職ニハ良キ口実モ有之、其關係ハとにかくに、宏大ナル枢機ニ相成候間、辞表モ中々尤ニ相聞ヘ申候ヘトモ、本人の心中ニハ色々相混ジ居可申、種々不評判有之、本人の耳朶ニモ触レ居候事ト存候」(九鬼隆一より松方正義宛書翰, 明治34年2月6日, 『松方正義関係文書』第7巻, 212～213頁, 大東文化大学東洋研究所)を見ると、1901年2月には既に和田長官が辞表を出した背景は、製鐵所の失態が辞表提出の「良キ口実」としてあったことを伺わせ、背後には別の「枢機」があると匂わせている。これが何をさすかは明らかではない。『報知新聞』では、機械設備の発注におけるリベ-トが政党に流れたとの憶測が流されている。この頃より、製鐵所は、政争の中に巻き込まれていたことは、清水・松尾論文132～134頁に掲載されている書翰にも、井上馨らの手足となっていたかのような記述も見られる。

しかし、山内万寿治の書翰(1901年10月5日)による評価をそのまま使って、製鐵所の動きを評価するのももっと慎重であるべきである。1901年7月23日付け山内から斎藤海軍大臣宛書翰(斎藤実文書)では、山内は、第15議会での和田演説の内容について十分検討していなかった。議会での格調高い論理的で筋の通った和田演説について軽視し、和田意見書の構想から言えば、当然製鐵所は部分的に呉製鋼所構想と重複してくるということを認識できながら、和田を「反対ノ主本」などと山内が批判するのは当たらないと言わなければならない。それは、あくまで海軍側の自らの予算を議会で通過させるための障害物としか見ていない一面的な見方と言わなければならない。海軍側の巧みな議会工作と政治的経済的性格を熟知していなかった製鐵所官僚の稚拙な対応が創立期の製鐵所の評価にバイアスをかけ、偶然的要因がそれを増幅してしまったと言わなければならない。

- 44) この問題は、国家資本のモニタリングという別の角度からの研究が必要である。佐藤昌一郎氏が明らかにしたように、製鐵所は設備投資にかかわる予算は、創立費として一般会計予算の審議対象となる。したがって、財政的な余裕のない初期議会から日清戦後経営期には、製鐵業に殆ど情報をもたない議員が、予算審議を行うのである。したがって、しばしば、的外れな方向に予算審議がむかい、そのために製鐵所建設に支障が生ずるという事態がたびたび生じたのである。製鐵所は確かに国家資本としての非効率や財政制度上の制約をもっていたが、実はそれなりの厳しいモニタリングをうけていたのであり、こうした点についても従来の研究ではほとんど注意が払われてこなかったという問題がある。

外国人のみた創立期官営八幡製鐵所（長島）

なお、付言しておけば、社会主義下の国有企業は殆どの場合、財政民主主義が十分に確立していないために、国家資本の予算についても議会のモニタリングがなされていなかったのである。したがって、国家資本は、不正や汚職、予算の無駄遣いなどが恒常化する可能性が存在していたのである。

創立期八幡製鐵所は、この点では、初期議会から日清戦後の特殊な状況で、厳しいモニタリングを受けなければならなかった。したがって、国家資本一般のレベルで議論を単純に処理することはあきらかに誤った結論に導くおそれがある。

Foreigners' Observations on Early Imperial Steel Works, Yawata

There were some differences between foreigners and Japanese about observations of early Imperial Steel Works, Yawata, first modern integrated steel works, built in 1901. Why such differences happened?

Foreigners almost approved that Japan could build new integrated steel works, although Japan had not enough modern steel making technology. But Japanese newspapers and members of Imperial Diet relentlessly criticized the incomplete technology, because Yawata showed them unskilled operations at Yawata opening ceremony. And they blamed president of Imperial steel works for the inadequate finance because of the budget execution without the Diet approval.

While Yawata was building, Japanese government had some plans to build the steel works at Kure Navy Arsenal, Hiroshima Prefecture, where they planned to make armor plate and gun. Members of Diet opposed that plan, meaning the double investment plan when Japanese Government fell into strict finance constraint due to military expansion. Navy authorities, therefore, invited members of Imperial Diet to Kure, catching the opportunity that the members visited Yawata to attend the opening ceremony of Imperial Steel Works. Navy authorities showed them the operations and the shooting test at Kure with a careful plan and persuaded them to consent to the steel works building budget. As a result of Navy maneuver, Navy could obtain their consent to the steel works budget, but early Yawata had kept bad reputations for a long time.

(NAGASHIMA, Osamu 本学経営学部教授)